

韓国特集

「～韓国を知り、日韓演劇の
未来を探る～」



2020年11月22日 (日) 13:00~15:30 (Zoom)

「演劇を通してみる戦時下・植民地下の日韓」

[講師] ソン・ギウン / 성기웅

[講師+ゲスト] 外村大

[司会] 川口典成

[通訳] 韓国側 石川樹里 / 日本側 洪明花

[通訳補] 藤本春美

[会場] 大学路・アシテジ韓国センターオフィス / 下北沢・アレイホール



「日帝時代」の朝鮮を 背景にした演劇創作

성기웅 (ソン・ギウン、劇作家・演出家)



○ソン・ギウン 僕は2006年に第12言語演劇スタジオという劇団を立ち上げて活動しています。戯曲も書き、演出もやっています。また日本の戯曲を韓国語に翻訳紹介したり、日本の劇団との共同創作にもいろいろ携わってきました。

第12言語スタジオという劇団名の由来は、韓国語(朝鮮語)を使う人口の割合が全世界で12番目に多いというところから来ています。大学では文学を専攻したので、言語や文学に対する関心が深く、僕の作品はほとんど言葉や文学がベースになっています。大学時代に1年間、交換留学生として日本で勉強する機会がありました。東京外国語大学の朝鮮語学科に留学して日本語を学びましたが、そこでは日本語だけでなく、韓国と日本の関係、日本の研究者たちが韓国文学をどのように研究しているかについても学びました。そして僕にとっては、日本語や日本文化を学ぶだけでなく、日本を通して韓国の歴史、文化や文学を新しい目で見つめ直す機会にもなりました。特に韓国の、いわば日帝時代という時代について、あらたに学ぶことができました。

12th welfth
ongue
heatre
제12언어 연극 스튜디오

The name of his theater group, 12th Tongue Theatre Studio, comes from the fact that Korean is the 12th most spoken language in the world.

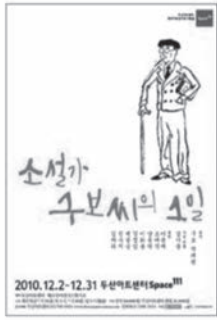
それから僕は大学の演劇サークルで活動していたので、日本でもいろいろ演劇を観て歩いたのですが、その中で特に印象に残ったのが、2000年に東京で上演された平田オリザさんの『ソウル市民1919』という作品でした。演劇のスタイル自体もとても面白かったし、日帝時代にソウルで暮らしていた日本人の家族を描いているという点が非常に印象的でした。その後、2015年に僕は平田さんの『ソウル市民』四部作を韓国語に翻訳して出版しました。

平田オリザ「ソウル市民」四部作
Korean translation



僕が日韓合同で作品を創っていることは、日本の方々もよくご存じだと思いますが、韓国でも自分の劇団の作品を創っていますので、まずはそのうちの一つをご紹介しますと思います。

■ “小説家クボ氏の1日”



■ 『小説家クボ氏の一日』

○ソン・ギウン 『小説家クボ氏の一日』という作品です。僕はこの作品以外にも、小説家クボ氏を主人公にした演劇を4作のシリーズで創りました。

主人公は画面左のクボという小説家です。1930年代に活動したモダニズム小説の作家です。韓国ではこの小説家クボよりも、その親友であるイ・サン（李箱）という詩人のほうが有名です。僕はクボ氏を主人公として、その親友イ・サンが登場する作品をシリーズとして4作書きました。時代背景は1933年から1937年までです。1930年代の前半は、朝鮮でモダニズム文化が花開いた時期です。

■ Kubo (1909? Seoul ~ 1986 Pyeong-yang)



■ Yi Sang (Lee, Sang) (1910 Seoul ~ 1937 Tokyo)



(1935年?)



そして1937年以降になると、日本が中国で戦争をはじめ、全体的に軍国主義、ファシズムが台頭し朝鮮にも暗い影を落としていきます。さっき申し上げたイ・サンという詩人は1936年に東京に渡りますが、そこで不逞鮮人として警察に逮捕されます。そして体を壊し、1937年に東京で亡くなりました。

1930年代というモダニズムが花開いた時期、朝鮮で20代の青春を謳歌していた芸術家たちが、結局は暗い戦争、政治の影に翻弄されました。イ・サンが東京で死ぬまでの、その5、6年の歳月を、これまで4作のシリーズにまとめました。それでは一場面を見ていただきましょう。

※舞台の映像が流れる

いまクボは、イ・サンと一緒にソウルの食堂でソルロンタン（牛骨スープ）を食べています。クボ自身も1930年に東京に1年間留学していたことがあるのですが、クボは東京で朝鮮人の女子学生に出会って初恋をしています。

これはクボの小説の一場面で、1934年にソルロンタンを食べながら、その4年前に東京に留学して女子学生に会い初恋をしたことを回想している場面です。もともと自伝的な小説で、そこにはクボという名前の作家が登場します。

この場面は、銀座から新宿にあった武蔵野館に映画を見に行く途中で、大学で英語を教えている教授に出会ったという設定です。

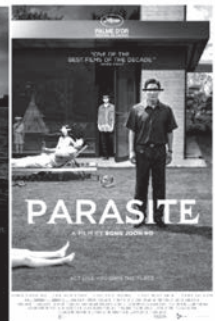
クボとイ・サンはふたりとも映画が大好きな芸術家、文学者でした。そして、このクボという小説家は自分の小説の中で映画の技法を文学的に利用するという実験をしていました。映画にはオーバーラップという技法がありますが、これを小説に適用して文章の中でオーバーラップの技法を使っています。現在・過去・現在・過去と、時間が交錯する技法を文章の中で使っています。クボが小説の中でオーバーラップという映画技法を使ったように、僕は演劇の中でオーバーラップを使っています。先ほどご覧いただいたように食堂で食事をしているときに、横に4年前の初恋の女性が現れたりするような構成をとりました。また、紗幕を張って、紗幕の前は現在、そして4、5年前に東京でチャップリンの映画を見た思い出がオーバーラップするという場面でした。

1930年代には、イ・サンよりもクボのほうが有名な小説家でした。しかし僕がクボはあまり有名な小説家でないと言ったのには理由があります。1950年の朝鮮戦争の時代にクボは北朝鮮に渡ってしまいます。彼は北に渡ってキム・イルソン（金日成）が実力を認めるとても有名な一流作家になります。そして1986年にピョンヤン（平壤）で亡くなりました。韓国では1989年まで北に渡った作家は研究してはいけないことになっていたのです。クボ＝パク・テウォンの作品は韓国では知られていませんでした。「禁止作家」だったのです。

クボ＝パク・テウォンという作家は映画が大好きでシナリオも書いていました。パク・テウォンは北に渡りましたが、娘は南に残り、その娘の息子が映画監督のボン・ジュノなのです。映画や文学に対する才能が引き継がれているのではないかと思います。



■ 映画監督 ボン・ジュノ



■ 『가모메 칼메ギ』

○ソン・ギウン 次の作品をご紹介します。2013年にソウルで初演した『가모메 (かもめ) 칼메ギ』という作品です。これはチェーホフの『かもめ』を原作としたものです。私はもともとチェーホフの作品は日帝時代に置き換えられるのではないかと考えていました。チェーホフの作品も、やはり19世紀後半の非常に変化が大きかった時代のロシア社会を描いていたと思います。

『가모메칼메ギ』(2013、2014・18) □かもめ



□ Doosan Art Center

しかし、僕の先輩の演劇人たちもすでに韓国で、チェーホフを日帝時代に置き換える、翻案する作品をいくつか作っていました。そのうちのひとつに『三人姉妹』を翻案したものもありました。原作の『三人姉妹』の中では三人姉妹が故郷であるモスクワに帰りたいたいという思いをこ

めた「モスクワへ」という台詞がとても有名ですね。先輩が翻案した作品の中では「モスクワへ」が「京城へ」となっていました。日帝時代にはソウルが京城と呼ばれていました。ただ僕はそれを見たときに、日帝時代の朝鮮を描くためには朝鮮人の登場人物だけでは足りないのではないかと考えていました。

『三人姉妹』の中では亡くなったお父さんは偉い軍人だったという話が出てきます。その時代を考えると三人姉妹が朝鮮人だったという設定では説得力がないのではと感じました。それで、さっきご紹介した『小説家クボ氏の一日』とはちがって、もしチェーホフを朝鮮のその時代に置き換えるとすれば、朝鮮だけではなく日本や満州にもその舞台を広げてみたらどうかと考えていました。

2013年に僕はドゥサン（斗山）・アートセンターから新作の依頼を受けました。ドゥサン・アートセンターは『小説家クボ氏の一日』も上演したことのある劇場です。僕は2008年からドゥサン・アートセンターのフェローシップのようなもので支援を受けていました。それでドゥサンから新作の依頼を受けたとき、台本を新しく書いて日本の友だちの演出家と一緒に共同制作をしたいと相談しました。それが韓日共同制作の『가모메 (かもめ) 칼메ギ』が誕生した発端です。

この写真はモスクワ芸術座のチェーホフとスタニスラフスキーとメイエルホリドと一緒にチェーホフの『かもめ』のテキストを読んでいる写真を真似て写してみた写真です。

第1幕から第3幕までは1936年の朝鮮が舞台です。第4幕はそれから数年後ということになっているので1938年になっています。

先ほど申し上げたように『小説家クボ氏の一日』では1934年から37年ぐらいがその背景になっているとすれば、『가모메 칼메기』はもう少し遅い時期が背景です。



図01

#時代と時間

- 第1—3幕：1936年（昭和11年）晩夏（8月末）から初秋（9月初旬）まで
- 第4幕：1938年（昭和13年）秋

#空間

- 黄海道ヨナン（延安）。ヨナン温泉付近の湖（南大池）の畔。
今は使われない古い船着場がある場所。

たった2年しか違いませんが、その2年が非常に大きな違いをもたらしていると考えました。1937年に日本は中国に対して戦争を起こします。そして軍国主義が濃くなり、そのことによって日本の朝鮮統治政策も非常に変わってしまいました。この時期から完全に朝鮮語や朝鮮文化というものが認められなくなり禁止され、「皇民化政策」に変わります。外地人も内地人と同じように皇国臣民となり、さらには軍人として戦地に送るといふ政策が変わってきたわけです。

先ほど紹介した『小説家クボ氏の一日』という作品は、日帝時代を描いていながらも、政治のことにはほとんど触れておらず、ノンポリ的な作品だと評価されました。チェーホフの原作も、もともとは政治的なことはあまり描いていないと言われているのですが、その背景を1936年から38年に設定することによって原作よりも少し政治色が強い作品になったと言えると思います。

翻案なので舞台を移したのですが、その舞台を朝鮮半島の北部にしています。北朝鮮

に舞台を移したのはとくに理由があったわけではなく、『かもめ』には湖が出てくるのですが、南には大きな湖がなく北にはあったからです。

図02

#登場人物（*年齢などは第一幕から三幕までを基準にしている）年齢は数え年ではなく満である。

ーリュウ・ギヒョク（柳基赫←トレープレフ）

二十二歳。作家志望。車能姫の一人息子。

父方の親戚とは付き合いが途絶え、母方の伯父である車能杓の家で暮らしている。

ーチャ・ヌンヒ（車能姫←アルカージナ）

四十一歳。女優。柳基赫の母。

東京で暮らしていたが、故郷の実家に訪れている。

ーチャ・ヌンビョ（車能杓←ソーリン）

五十四歳。（現代なら、六十代程度の感覚であろう）

車能姫の兄であり、柳基赫の母方の伯父

原作はアルカージナという女優がモスクワから小説家を連れてキエフの田舎の家に戻ってくるという話です。僕の翻案ではチャ・ヌンヒという女優が東京で日本の有名な小説家の恋人となり、彼を連れて朝鮮の田舎の実家に戻ってくる設定にしています。韓国の演劇史を見ると1920年代に近代演劇＝西洋演劇が入ってきますので、この時代に初めて女性が演じる「女優」という職業が生まれます。それで、僕の翻案の「1936年に40代である朝鮮の女優」という設定には若干、無理があったかもしれません。たぶん朝鮮演劇史では、女優の第一世代にあたる方ということになるかもしれません。

図03

ーソン・スンイム（孫順姫←ニーナ）

十九歳。ヨナン邑近辺の地主の娘。

柳基赫が愛する女性。

ー塚口次郎←（トレゴーリン）

三十八歳。日本人小説家。車能姫の恋人。車能姫と一緒に初めて朝鮮に訪れた。

ーイ・ジュング（李俊九←シャムラーエフ）

四十九歳。車能杓の昔の部下。

三十年間、車能杓の身の回りの世話をする一方、

二、三年前から延安温泉近辺で車宿の商売をしている。

彼の家は、やはりヨナン温泉がある温井里にある。

ーイ・エギョン（李愛慶/*原作には登場しない人物。もしくはポリーナの変形。）

イ・ジュングの長女。二十七歳。

一度嫁いだが、婚家を追い出され、実家に戻っている。

トリゴーリンは塚口次郎という日本人になっています。原作ではモスクワから来たトリゴーリンという小説家が息子の恋人ニーナを奪ってしまうという設定ですが、僕の翻案では、息子は朝鮮人でその恋人を日本人の小説家が奪うことになるわけで、少し複雑さが増すと思います。主人公の青年は日本に反感を持っており、植民地の支配国である日本からやってきた男に朝鮮人の恋人を奪われるという設定になるからです。

図04

ーイ・エジャ (李愛子←マーシャ)

李俊九の末娘。二十二歳。

柳基赫とは、幼い頃一緒に育ったこともあり、彼を愛している。

ー御手洗幸介 (御手洗幸介←メドベール=ジェンコ)

二十四歳。

延安の村で教鞭をとっている普通学校の教師。日本人。

李愛子に恋している。

韓国語 (朝鮮語) が、ほんの少しできる。

ードクトル姜 (Dr.姜←ドルン)

二十九歳。医者。エスペラント語を研究している。

李愛慶とは特別に仲が良い。

ー看護婦 いさ子 (いさ子/*原作には登場しない人物or←料理人)

二十代中ごろ。

ドクトル姜の助手をしている。日本人看護婦。

朝鮮で生まれ育った。

ーミヨギ← (ヤーコフ)

10代の少年。車能杓の家の下男らしい。

お話したいことはいろいろあるのですが、今日は時間の関係上このぐらいにしたいと思います。

この作品の冒頭の場面です。

13. 御手洗 [うむ……] [Kr]アイコシ!(愛子さん!)

間。

14. 御手洗 [Kr]エジャシ?(愛子さん?)

15. 李愛子 なんです?聞こえていますわ。

16. 御手洗 アー、オー。(いや…、その…)

17. 李愛子 ……?

18. 御手洗 *タンシヌン、ウエー、ヌル、チマチョゴリガ、コモヨ?
(あなたは、なぜ、いつも、チマチョゴリが、黒いのですか?)

19. 李愛子 は?

20. 御手洗 *アイコシヌン、チマチョゴリガ…、
(韓国語をうまく発音しようとする)コムソイダ。
クゴスン…ウエー?
(愛子さんは、チマチョゴリが…、黒い。それは…なぜ?)

21. 李愛子 これは人生の喪服です。

22. 御手洗 *サンボク?

いつも黒い服を着ているマーシャという女性にメドヴェジェンコという教師が求愛をする場面です。ここではマーシャは朝鮮人女性、メドヴェジェンコは朝鮮で働いている日本人の教師という設定です。

愛子

[K] Ae-Ja

[J] Aiko

← 『かもめ』のマーシャ

マーシャ役である愛子。愛子「あいこ」は朝鮮語では「エジャ」といいます。

エジャは日本語が少しできる朝鮮人。メドヴェジェンコ役は朝鮮語が少しできる日本人です。ふたりは日本語と韓国語を混ぜてコミュニケーションをします。この場面をちょっと観て下さい。

※ 『가모메 칼메기』の映像

原作ではマーシャといういつも黒い服を着ている女性ですが、この翻案では黒いチマチョゴリを着ている女性です。結局ふたりは結婚します。日本人男性と朝鮮人女性のカップルです。

医者役は原作では年を取った人物ですが、僕の翻案では若い医者に変えてありま

す。当時、朝鮮では西洋医学は入って来たばかりで、年を取った医者はいなかったのです。医師ドールンはエスペラントを勉強している無政府主義者という設定にしました。エスペラントは世界言語、すなわち言語間のヒエラルキーをなくす人工言語でした。

この劇に登場する若い朝鮮人たちは、すでに学校で日本語を教育された世代の人たちです。彼らは日本人の登場人物と日本語で会話することができます。でも年を取った朝鮮人は日本語でコミュニケーションすることができないので間に入って通訳をすることもあります。

もちろんチェーホフの原作をそのままそっくり翻案することは難しいですが、僕が劇作家としてこの作品を翻案するにあたり、この1930年代の朝鮮半島を舞台にして、劇作家チェーホフの原作をできるだけリアルに忠実に翻案することを心がけました。僕は劇作家、演出家としては、どちらかというと平田オリザさんのようにディテールにこだわるタイプの劇作家、演出家です。ただし、僕とずっと日韓の合同制作をやっている多田淳之介という演出家は、ほくとは芸術家としてのタイプがぜんぜんちがう正反対のタイプです。多田さんは僕の書いた台本を演出するときに非常にモダンな演出をほどこしました。そしてトリゴーリン=塚口という日本人小説家の役を現代のK-POPファンである中年男性のイメージと重ね合わせて演出しました。

それではニーナとトリゴーリンの有名な場面を観て下さい。

※『가모메 칼메기』の映像

ここはニーナと恋人トレブレフの場面ですが、いまニーナであるスニムという朝鮮人女性が涙を流しているのを見てトレブレフは彼女をからかいます。「そんなに上手に涙を流すんだったら、君は新派劇の女優になれる」、というようにちゃかしているのですが、それはその頃、新派劇というものが朝鮮に入って来て、「お涙頂戴」というものが非常に朝鮮でも流行っていたからなのです。

韓国の文化評論家の中には、韓国の文化、朝鮮の文化というものが日帝時代に日本から入ってきた新派劇などの影響を受けて非常にセンチメンタルな、お涙頂戴的なものに、感傷的なものになったのではないかということを行う人もいます。その頃、植民地にされていたわけですから、やはり日本に対する恨みや憎しみなどがある。心に悲しみがあるために、被支配者として新派的な情緒がシンパシーを得たのではないかという分析です。